

NPO 法人生涯学習センター進路相談会講演

〈不登校にどう向き合うか〉 (2020.8.22)

不登校については、これまで少なからぬ当事者、家族、支援者が懸命の声をあげてきたし、教育や医療の分野の研究者・専門家と言われる方々も様々な角度から発言しておられます、

しかし、その声は世間には届いていない。長年、当事者・ご家族のご相談を受ける中で、私たちの住んでいる地域社会はもとより、教育界においても、不登校理解は、この半世紀近い時間の中で、一歩も進んでいないように私には思えます。

小中学生の不登校は、約 12~3 年前、私の現役の頃、全国で 11 万人、最近のデータでは 18 万人、これは統計上の数字で、実態はこの数倍、数十万人の子ども達が、たかだか学校に行くか行かないか、それだけのことで毎日地獄の苦しみを味わっています。

生徒数が急激に減る中で、絶対数も発生率も増えている、状況は正直なところ、絶望的と言わざるを得ません。

私は不登校の子を持つ親、我が子と共に 30 年間、今も苦しみ続けている現役の不登校当事者として、同じ苦しみを抱える子ども達や家族の支援活動をささやかに続けながら、不登校問題を追究し続けてきました。

人は呼んでくれませんが、不登校の鬼、と自称しています。しかし、不登校問題の解決は難しい。尊敬する高知市の吉川教育長(当時)の号令、私の戦友高知市教育研究所の小西豊先生(当時)の奮闘、そして我が"たんぽぽ教育研究所"もよく闘った、しかし、解決するケースは稀です。どうしたらよいのでしょうか。

ここで大事なことがあります。不登校の「解決」、ということを誤解しないで欲しいということ。不登校の子どもが学校に行けるようになることが「解決」ではない。学校に行く行かないにかかわらず、不登校の苦しみから本人が解放されることが、不登校の解決、そう考えてくださいね。

私が今日お話ししたいことの核心、不登校を理解する、とはどういうことか、そのカギの一つがここにあります。

ご承知のとおり、高知県では今年から「不登校対策」が格段に強化されることになりました。今年 of 教育大綱で、全国平均を下回るという数値目標が設定され、多額の予算を投じて専任教員も多数配置されました。英断ではありますが、私は大変危惧しています。なぜか。

「対策」の成果を「数値」で評価することがどれほど危ういことか、対策の指揮をとられる方々はそのことを分かっておられるだろうか。

学力対策がいい例ですね。子ども達の学力をあげるという目標が、いつの間にか学力調査結果の順位をあげることにすり替わってしまい、教育現場の疲弊を深めています。大変残念です。

また、不登校を何も理解していない「専任教員」を数だけたくさん配置して何の役に立つのか。ひきこもっている子ども達と心の通う関係を築くには長い時間、血と汗と涙の努力が必要です。教員・支援者の自己変革が必要です。そのことを本当に分かっておられるだろうか。

不登校対策が強化されると、学校現場や支援機関は必死になります。何に必死になるか。

不登校の「数」を減らすことに必死になる。

不登校の報告件数を減少させることが「不登校対策」の目的になる、これは本末転倒です。

不登校の子ども達や家族に巧妙な登校圧力がかけられることになる、これも本末転倒です。

こういう本末転倒の悲劇を起こさないために不登校にどう向き合うか、私達は今、もう一度整理してみる意味があると思います。

今日、お話ししたいことは二つ。

- ① 不登校を本質的なレベルで理解すること、そこから本当の支援の道が開ける
- ② 不登校は子ども達が教師、学級の仲間、世間の大人、親、人間に対する信頼を失う時に発生する、人間への信頼を取り戻す努力が対策の基本にならなければならない

まず、不登校を本質的なレベルで理解するにはどうしたらよいか。

低学年の子どもが登校をしぶり始めた時、担任に相談すると100%「とにかく学校へ連れてきて」と、ベテランの先生に自信満々で言われます。

どの子どもも、学校へ行きたい、友達と一緒にいたい、そういう強い気持ちを秘めています。決して怠けているのではない。怠けて学校へ行かない子は一人もいません。

人間は社会的動物、群れの中において楽しく、群れの中において安心、幸せを得る生き物です。オオカミと同じです。

学校へ行きたいけれど、原因があって、理由があって行けない状態が不登校です。

支援者がやるべきことは、本人のその苦しみを理解することが第一、もし原因が判明すればそれを取り除く努力をすることが第二。

そのことを抜きにして、泣き喚く子どもを引きずってでも「とにかく連れてきて」が、現在の教育現場の不登校理解の平均的レベルです。絶望的現状です。

不登校という社会現象が出現して半世紀、この間の教育関係者の理解の進展はゼロ、それほどに不登校は理解してもらうことが難しい問題です。

けれど、問題の核心に近づく道はあります。

それをどういう切り口で理解すれば問題の核心に近付けるか、30年かかって私が辿り着いた、本質的な理解のための、いくつかの切り口をお話したいと思います。

不登校の本質的な理解とは、

不登校は原因も症状もその後の経過も1000人1000様、早合点せず、多面的に考えることが大事です。

多面的な不登校理解の切り口の第一、

- ① そもそも、子ども達に学校へ行く義務はありません。学校は子ども達が必ず行かなければならない場所ではありません。義務教育制度というものが、圧倒的多数の人に勘違いされています。

子ども達が生き生き元気に遊び、学ぶことができる環境を整える「義務」が国民、国家・自治体に課されているのです。

そういう環境で教育を受ける「権利」が子ども達にはあるのです。これが義務教育制度の本質、その理解が決定的に欠けている現状が悲劇を増幅しています。

② 不登校は悪い事、困った問題ではありません。当事者が学校へ行きたいけれど行けないことで、つらい哀しい思いをしている限りにおいて解決が必要な問題なのです。

現在の学校は、テストの点数学力を追いかける訓練が主要テーマ、その結果、いじめや競争の温床、命をかけてまで行く価値の無い場所になってしまっています。

勉強は、先生や仲間と共に仲良く楽しくしてこそ意味があるもの、それのない勉強はその子の人生、その子の自立、その子の幸せには何のプラスにもなりません。

現在の学校の多くで行われている勉強は、教えられたことを憶えさせられる勉強、やらされる勉強、学ぶ喜びの無い勉強、こんな勉強は人生には何の役にも立ちません。

③ 不登校は当事者やその家族・個人の問題ではありません。不登校を生み出している社会の構造の問題、不登校はその社会構造に起因する社会現象なのです。

なぜそう言えるのか。昭和 20 年代まで、つまり 70 年前には、この国に不登校は存在しなかった。飲んだくれのおやじも、意地悪な教員も、人見知りする心のやさしい子どもも、現在と同じようにいたのに。何が変わったのでしょうか。

みんなが等しく貧しいと人々は自然に助け合います。そういう社会では不登校は存在しない。昭和 20 年代以前の貧しい農村社会では、人は助け合わないと生きていけなかった。そんな社会には不登校はなかったのです。

高度経済成長政策がもたらした社会構造の変化、無制限の経済格差を許容する競争社会の成立、それが地域住民の絆の崩壊、人間という生き物の群れ・コミュニティの崩壊をもたらした。

その結果出現した社会現象、社会問題の一つが不登校です。ひきこもりも同じ構造的理由を持つ社会現象です。

こんなこと言うてるのは日本でぼくだけですが、不登校理解の核心ですので、このことはぜひ、記憶にとどめてください。

④ 不登校の原因は本人には無い

ほぼすべての人が不登校の原因を本人の資質、本人の家庭環境や成育歴の中に求めます。それは間違いです。

私が 20 年間扱ってきたおよそ 400 のケースを子細に検討した結果、95%は学校に原因がありません。

私も支援活動の当初は、原因は 1000 人 1000 様、正確には分からないと思っていました。

数多くのケースに出会い悪戦苦闘する中で、見方が変わり、次第に確信ができました。

不登校のほとんどは、教員の暴力、暴言、心無い一言、何気ない無視、愛情の無い指導が、クラスの仲間の連帯感を損ない、子どもの心を傷つけることを契機に発生します。

そういう教員による教科経営、学級経営の結果、クラスの人間関係が崩壊する。強い者が勝ち、弱い者が負け、そういう価値観が支配する学級から不登校は発生します。

教員はそれに全く気付いていない。あえて言えば一方的に子どもの側の、それに対する我慢、忍従、慣れ、あきらめで、からくも成り立っているのが現在の学校教育の実態です。

⑤ ゆえに、当事者を変えて不登校問題を解決するのではなく、

家庭、学校、地域社会の意識や構造を変えて問題を解決するという考え方に立つべきです。

ここが、従来の不登校対策の考え方と私の考え方の根本的相違点。遠いまわり道のようにだけれど、この道こそが王道。そのためにはこの国のあり方、社会構造を変えなければならない。限りなく難しい道ですけれどね。

⑥ ゆえに、不登校問題の解決は、人々が助け合って生きる絆の回復、民主的なコミュニティの再構築によってのみ可能

そのためにはこの過酷な格差社会、競争社会を、人間本来の助け合って子ども達を育てる「オオカミの群れ」に戻さなければならない。気の遠くなるような難問だけれど、そう思います。

私はこういう切り口から、不登校というものを考えています。今、学校へ行けなくて苦しんでいる子ども達を救う前提として、不登校を理解する、深く、多面的に理解することが大事ではないか、それが先決ではないか、不登校の子を持つ親、不登校の当事者としてそう思います。

支援者として不登校にどのように対処するか。

学校に行けなくて苦しんでいる子ども達と揺るぎない信頼関係を築くこと、方法はそれのみです。そのためにどうするか。

① 人間は社会的動物、群れから離れては生きていけない、不登校が辛いのはそのため。

現在の群れ(家庭・学校・地域社会)は、格差を容認する社会、排除、差別、イジメの構造を土台にしてできあがっています。心の絆で結ばれていない烏合の集団です。

そういう困難な社会状況を頭に置きながら、当事者本人の幸せは何かを追究する。

学校に帰ることが当事者本人の本当の幸せでない場合もあります。そういう想像力を支援者は持たなければならない。

仮にその幸せが、学校に帰ることであるのなら、本人を叱咤激励して、ということではなく、学校、学級に本人を温かく迎え入れる環境を整えることを第一に考えなければならない。

② これまでの良心的な不登校対策は、当事者と教師、当事者と家族の信頼関係の修復、構築が基本でした。

それは間違っていないが、あくまで保護者、当事者との信頼関係を築くことを最終目標にすべきで、登校させることを最終目標にしてはいけない。小西豊先生の活動に学ぶのはここです。オセロや知恵の輪と一緒に遊べるようになる。そこまででいいのです。

信頼できる人がこの世の中にいることが確認できれば、人は幸せになれる、生きることの意味が見つかる、そこまでOKです。

登校させようという意図や数値目標が頭にちらつくと焦りが生じたり、登校圧力に転化する恐れがある、それを強く危惧します。

③ これからの不登校対策は、学級の仲間みんなで迎え入れる環境づくりがカギ。

家庭訪問を重ねてくれた教員個人との信頼関係だけでは、学校復帰はまだまだ不安です。

待っていている仲間がいることが分かれば、大きな安心が得られます。

困っている友達を助ける、みんなで助け合う、そういう価値観が学級の最上位の価値観として共有されれば、学級はすべての子どもにとって楽しい幸せな場所となります。

そういう学級づくり、学級経営が決定的に大切、それを実践した教師が高知県にもわずかですが実在します。

それができれば、学校へ行くことが楽しくなる、勉強する意欲が湧く。

それは本当の学力向上にもつながります。イジメ、非行、自殺、荒れる学校はなくなります。

そこからのみ、全ての教育課題を根本的に解決する展望が開けます。

不登校に対する本質的な理解が深まり、それを踏まえた不登校対策、学校・学級経営が実現すれば、不登校だけでなく、学力問題などを含むすべての教育課題が一挙に、根本的に解決する。

おさらいをします

不登校問題を解決するには、不登校に対する本質的で多面的な理解、その上に立った子どもの気持ちを最優先する対処が必要。

それができれば、不登校問題だけでなく、すべての教育課題が解決できる。

そのために、親、教師、支援者が認識を変えなければならない、自己変革をとげなければならない、私もまだその旅の途中です。我が子と接してしばしば思う、自分はダメな親。

自分を変える、それは自分自身がもう一步深い人生に踏み出して行くこと。困っている仲間を助けるという生き方、人間の群れ本来の価値観を獲得することによってのみ、自己変革は可能となります。

学校を拒否する子どもを変えるのではない、保護者、教員、教育行政、世間の大人、私自身が変わる、自己変革を遂げることが先決、その先に希望が見えてくる、みんなの幸せがあります。